

## 夢と挑戦は時空を超えて！

今年のパリオリンピックに、我が新津二中の卒業生である原わか花さんが出場したことに、全校生徒一同、誇らしい気持ちでいっぱい嬉しい夏でした。

ご存知の通り、当校出身者には、原さんだけでなく、近年では、ラグビーの稲垣啓太さん、野球の笠原祥太郎さん、古いところだと大相撲の大寿山さん（現相撲協会理事）などいます。自分だけが知らないだけで、他にも、様々な分野で大活躍の方もたくさんいるでしょうし、その道の一流人やある分野では世界的に名を馳せている方も当然いるでしょうが、世間の知名度が大きければ大きいほど、その影響力はもちろん計り知れないものです。

「新津第二中」と言っても反応がないのに、「ラグビーの稲垣選手の母校です」というだけで、「へー」と返してくれる人がたくさんいるのはその証左でしょう。

有名人・著名人が自分と何かしらの関りがあったり、自分の家族・親族・友人・知人・同窓生・同級生などにそういった人間がいると、どこか嬉しくなりますし誇らしく感じるものです。

私などはまさにその典型で、裏を返せば、ささやかな人生しか歩んでこなかった、何者でもない自分が、そういった華やかな経歴の関係者等を、世間の羨望や尊敬の的としての分身として利用し、身内感覚で胸を張りたい気持ちがそうさせているのだと思います。

それはそれで決して悪いことではないと思いますし、自分の関係者・知人等身近な人間だからこそ、その活躍に敬意を払い、自分の人生の励みにもしたいものです。

そういった観点から、私の残された人生で、今後、最も楽しみにしていることがあります。それは、高校の同級生、私の高校3年生時のクラスメートが、ノーベル物理学賞を獲得することです。

彼の名は、「香取秀俊」氏。

東京大学工学部卒業、東京大学大学院物理工学専攻教授、理化学研究所主任研究員の工学博士です。日本IBM科学賞、仁科記念賞、日本学士院賞、江崎玲於奈賞、基礎物理学ブレイクスルー賞、本田賞など、国内外の科学賞・学術賞を総なめにし、残るはノーベル物理学賞と、若き50歳代の頃からここ数年、毎年受賞候補として有力な一人に挙がっているのです。残念ながら、昨日(10/8)発表があった今年の受賞はかないませんでした。とても残念でしたが、快挙はまたこれからの楽しみとしつつ、近い将来必ずや受賞の日が訪れると信じています。

彼がこれだけの受賞歴を誇り、ノーベル物理学賞の候補に挙がっているのは、主として、「光格子時計」という世界で最も精密な原子時計を考案したことによります。この「光格子時計」の精度は、通常のセシウム原子時計の1000倍にもなり、1秒狂うのに300億年以上かかる計算になると言われています。

この「光格子時計」の理論に関係する彼の講演を、同窓会の折に一度聴いたことがあります。本人はわかりやすく説明したつもりだと笑って話してくれましたが、理系出身の私でもわからないことだらけでした。

「光格子時計」の何がすごいのか。「光格子時計」及びその理論を用いれば、例えば、わずか1cmの高低差で生じる重力の違いによる時間の遅れをも検出可能となるそうです。これにより、「光格子時計」は高度計や重力ポテンシャル計としての使用が可能となり、噴火や津波の予知やGPSに代わる新たな測地技術にも飛躍的な貢献が期待されると考えられています。また、2030年までに予定されている1秒の定義の変更でも、「光格子時計」は新定義の最有力候補だということです。そして、小学校5年生理科の教科書(大日本図書)の「りかのたまてばこ」というページに、写真入りで彼の業績が取り上げられています。

同窓会の懇親会の中では、他の友人たちが、こんなことも噂していました。「『光格子時計』の理論って、アインシュタインの『相対性理論』にも匹敵するらしいよ」「え、じゃあ、タイムマシンがいつでも創れるの？」

その可能性を判断できるほどの学術的な知識や理解を持ち合わせてはいませんが、我々凡人には理解しがたいとてつもない理論ということだけは理解できました。

ノーベル賞受賞の日本人（日本人国籍取得者含む）は過去 28 人。オリンピックで過去金メダルを獲得した人間約 200 人と比べれば、また、その賞金が日本円で約一億 5 千万円であることを考えると、世の中で最も受賞が困難である栄誉が、ノーベル賞だといっても過言ではないでしょう。

高校時代、テキトー男で落ちこぼれグループの筆頭格であった私などは、当時のクラスメートの香取君と特に親しくさせていただいた間柄ではありませんが、このようないずれノーベル賞を受賞するであろうほどの大科学者と、同じ学び舎で学校生活を送り、少なくとも高 3 の 1 年間は同じ教室で机を並べて授業を受け、共に大学受験に邁進していたクラスメートであったというだけで、ただただ単純にこの上なくうれしい限りです。

それにしても、高校時代に同じ空間と時間を共有しながら、大学進学後の我々二人が歩んだ道は、そのベクトルの矢印の方向も大きさも異質のものでした。

自分は、大学の講義そっちのけで自転車にまたがって旅ばかりしていました。ゼミの教授に「何しに大学に入ったんだ」と怒られながらやっとの思いで頭を下げてもらったお情けの単位と卒業。一方で、香取博士は、来る日も来る日も実験や研究に寝食を忘れて没頭していたのだろうと容易に想像できます。

ひと昔前は、立身出世の象徴として「末(すえ)は博士か大臣か」と言われていました。香取博士はまさにその体現者で、その実直な人間性も含め心から尊敬に値します。

しかし、生徒の皆さん、勘違いしないでください。博士や大臣が必ずしも偉いわけではありません。香取博士のような人ばかりではありません。中には尊敬できない学者や政治家もたくさんいます。このたよりでも何度もみなさんに訴えてきたように、たとえ凡人と言われようとも、たとえ社会的な評価など得られずとも、常に家族や友人を愛し、近隣の間人を大切にし、地域に貢献し、誰にも公正・

公平で、他人に迷惑をかけずに、誠実にまじめにひたむきな真摯な生き方もまた、ノーベル賞級の立派な生き方だと思います。

日時計、線香時計、ふりこ時計、クォーツ時計・・・、そして光格子時計。より正確な時刻・時間を求めて、時代とともに時計も飛躍的な進化を遂げてきました。夢を追いかけて続けひとかならぬ努力で「光格子時計」を考案した香取博士は、今なお新たな夢に向かって挑戦し続けています。

常に夢を持ち続け、挑戦し続けることは、たとえ平凡な生き方であれ、つつましい生き方であれ、誰にとっても大切なことです。我々凡人もまた、一步一步ひたむきに生きていきましょう。時計の針が一秒一秒時を刻むが如く。